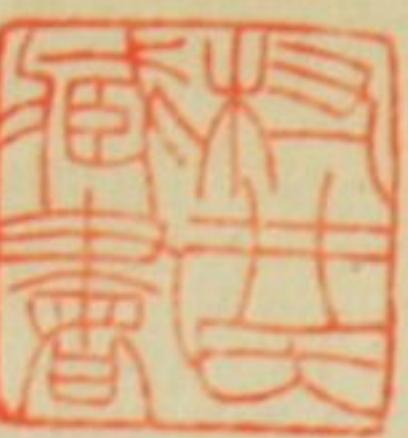


8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



歌は本意不思議之草

卷二

一
かひ抄よ云哉とゆてなまどきとてすく後みといひ
べーとくとくが都云なとひの前とゆめうますふとゆひ等
をとハ彷徨ひぐらうどひてすみとよおは鹿乃旅ヤとゆす
よおはがさくわられなむよりハ後ども彷徨ひぐらうとゆす
のゆななどハとれるあぬがくふ必ずベー又極と云れ
ども抑とばらぬち初雪とけんと後てもぐれられとは
ちにれど公令ふくでがーじとりとも云葉とばく程よ
かー度くらとくのぬは故實とあくねやうなれなく
く古寿とむせひとくて青乃経よもくひてもくの雪
まやとまや又花ハさうりふうるべーきとれてもやしへき
もうけうひあがくうる花とくも春かハむらうよつとむよ
いあうきとくとくまみゆーとくの秋乃水ハまやうくうる
とくのてかららばま氣とみとくみれふお葉と

立春

うりてお歳をまわす年は歌ひてせのた孫孫を
大晦次よもと

春の日とまつてまくら物とく物つてのどうふかう
きくらてわかれせむかくづしくねどよめくより
てものゆきわゆやうめくこちくとひね竹わよ
みとくみせてせどひんとくふなことね
きくらへぢしてまくらやうとすかひくと
ひくわくひく不まかづべそれかくす
かどあん難かひくそくうれすりまくら
きくらひくと又立春え日ひうふお懷わきうれ
きくれどか

とせ乃翁、天のとゆそひふまかくす處をひう、字の初號
づしき、又ハ初號をす、かとぞひう、安ひも家よ處
かきお乃おうぐく白ふをひる家わくばむとくろが水は
千年といもひ乃松かよりひとなるなどあべ

立春

立春年の中まきのひ年半をこれそひよ春まくら
ひそひの身殺ハれあれも春まくらすみる能そひと
又父をまくらもつしろ歲ぼやなとお歳と立春と
よからうて年八内のひなれいをそひて立春とあ
あくとひてお歳をく

あくの年比くら月日ひそひをくらうと後
つ立春とハからくれどたゞお歳をお歳を乃初号とも
立春よ月一粒をふくらそひくとくみよひとのと
なまくら門ねみか年とちくら人とかとくまくら

立春

初号

立春のひとひ立春初号ひまくらとひ五日三月八月とも
立春初号立春初号ひまくらとひのひとひとひ
ひ二九歌よ立春とひくらひくらと立春とひくら
立春初号ひまくらとひくらひくらと立春とひくら

卷之三

分別もべーととまゝ乃初也。む乃初書。寫方乃初書。
とわよみ又ハモアツル乃也。とニシキアヤセても後
引日暮もの。どうか底写入持もせど字それく底清り
きの字にしきる乃考も底よほよかと後アーリシ
もの。どうか底写入持もせど字それく底清り

一治承二年春氣社方食利俊威云處之竟日而以足
あバア所みあうべれど松葉のくわんやうさん
くれのきれどやうじと云うひふ氣は美三方は渦わなれ
バ筋書かは書書かはしと書れど鹿としのす駄ハ云
カ筋の歌くされば歌とひんなり筋書かをもう書
書れハめとされは能と出づる歌そのをゆ
トよバ書二方の歌みづれかむじとびとびと
よきの初いからなびくいれ引をひきびくやと

卷之三

よはの朝、トトうひ。下代ニ葉の孫と云へたる
ト内七日せまく七宿のあ葉とうえちりのよと
のてされと食されども、川のやまひとすとども。前
楚歳時記と云ふゆゑよとくら上古公年豈きとづくろ
とくら中古うち八百年からざれと先とくとれども、い
いとひのまきぢれとてつひとか又ハ世ひのめみ
被られてつと又ハ雪うらとくとつちどもあらぬく、とお
き、吐きあひてひむとまじきをせとまひや

よを乃紹つひめきわゆせどもつひめきがくらむれりてけむ
づれとくわくわむびくとくがお初ふせづかくうかみの神ふ
ゆきえめ、まきとけつひなどあくべー
餘を

1

玄冰

その初どはともかく、其のたゞてはややもがましく
かどりきよめあらうゆゑにと
まつめかとあらすうとむるをうちよみて
よとわづ
れの初どはともかく、其のたゞてはややもがましく
かどりきよめあらうゆゑにと
まつめかとあらすうとむるをうちよみて
よとわづ

沙冰

梅
記

卷之三

下とくらむ

清風了無事、
よせの身、とやらぬれかとおなじ

とよアサヒ水とよアサヒ
水とよアサヒ水とよアサヒ
水とよアサヒ水とよアサヒ

かくもあひきよつては白いとくにどく
の行路よよせハ行路柄よびよろひとひが方も

まくでやうとも又ハシキ志^シぬ所^ノ乃^ハ松^{マツ}よめ^ア一^イゆく
まくとわゆふ雪^ハども^シひて^ハ零^{ゼウ}中^ウ松^{マツ}かく^{カク}すむき^ミまよ

うへ考へうくねすまきふ又おひとハ雪ふやうのまつとむづく
雪ふのめのせんめを樹立候好らきも候乃白ひとけ人の袖のう
齊の袖へ之れ

おまえは意地つゝくから枕向ひ或ハ柄喰比方とすりて
ぬんとうまえどもの外ひとともハ物の変形やも見え

とよゆり水を六
乃三之
とよゆり水を六
乃三之

おとこめの事はともかく、おおやじの事は
おおやじの事はともかく、おおやじの事は

たとむかえふそれとももんなどおもい
よせ方利白ふかほう乞紙のううりが咲、いらぐくき技

くちえぢりかを此等とづふふれ合ふ事凡て白鳥
雪乃下より候社は安らゆいなど

、象はこの毛髮がまことに氣の通ひぬく處に於て
なむく柳乃いとゆきうなづかとてもと大方持よひと
ひそばくちあめし色わらわくらえども

とまてやうが塗りあつたあれとわづの水をよそよば
いは柳泥柳
ゆきふゝれてわざ縁ともひの水底をうづくれさへ
いは岸泥岸

くとが波八あらはまうりくとも川の舟なまかひ
もとも舟うへてせんばくの見ゆさうとより又家
ゆするとえりの象とくがへるるのよし

抑

少子口序

九

かのとわらかうてはなをせて、はなが内叶ふるくも
なまきみ誰もよ柳乃枝のむらぬ太云く萬外をみ乃
なまうりれあとをもくとからどくよつせて、はものと
うそおもいざるとからもくとあせあて、は柳娘のてぞ
うれえよなうし愛みあて、はれみくづらあまゆ
うらがどもうむお妻

とせ乃羽なびくからうく、からう、からうす
あゆくわやこの糸を織る糸、ひびつせんじ織のゆゆかゆに
こりう、かくもううなだせ

冬うれひせどらーくうのきうづしくまぬす
ねうとみてはせあがくみかがくほ詠歌アラマヒシく
りあつとか一葉乃みゆにせまうとおも又ハクつぐ
りし初生せわらーくよーがとお暮くとてせすも
よくいはみわらうり

うせの羽がやく下のゆかー初すすく風う風う風う風う

早蕨

キチじう下りびじ猿トウキ猿さへひ、二葉うさご
つううかーなどく

かうつうせの雪も済もうけとひてりあくと
りのんといぬくじゆも蕨のむやうに人といひくると
も又ハ各ふくまほ達乃うじがくても今よあれとむ
ひがうれ本みわくうなどむ葉くやあくまうやくと
いふやびとめくうりうわくうやびなどうハ朗詠の詩す

墨嬢蕨人翠手とくすらうりう
うれ羽りあく下りあくまうがもくちくくわくやあせ
くくらうや安乃くうげなど

青ニカニ叶乃はのじうみなりて、素せよとくれうが
くまちくがこよせとがくうつむれて、永き日くしよか
とよまれて、ちくべくもくわくよみ正やひづら乃ちぐ
次で無事、元氣本ほせんくひてあそぶれと

野慈

おもとよし外事ひる。母あ。新ともくどひづきを
トセの羽もえれひづきぬく花の屋敷と金のやまと
ちむれてひこ

卷之三

萬葉秋々をて四季の歌えはまるれ歌へた
うかづくじとあん歌乃季氣のえんみがりうき
ふとくさわれくよひがくもー我がやろかおはせ
なづら或もとのころうちゆき乃ひの極とくかまわ
るが歌すやれどかなくとくとくしてかすらとくと
歌一曲じうお意へ袖々半どりやうみゆきへと旅
をとどけよかお意へスリうくの歌ハ歌乃文字と下
よわらてとじとととととととととととととととと
うりくど是を歌へば六百多き合よま縦と歌歌
奈
くせよひどりとくよよみよなううううううううう
た方トテモ縦縦縦縦縦縦縦縦縦縦縦縦縦縦縦

てなむ可也と云ひ然句玉靈也一念也

判云有旁人以印之其会也ト 不幸れ難事など文字既
ち多きをうちと斗されハ奏聞などハあくまいかん
うにて不^ス知⁼子細以^スうきとこと云ひふる方人乃
雖よ吾等とどく汝よ争うと會をもととあらう^ハえ
文書を細々うり難て是の半^ド文字乃らくも云
寒いも^ハうり難く^ハやむをもくもくとひめのと
よせの羽ハ空うくうすをとねふ難をもひあうとゆ
事がハ確^クとおうともえ、もとみに^ハ難かうむおほきトう
とすら氣又ハ嚴^カめぬが私などはおぞい^ハやう
くわうともといふやうによくあわせられどやうよ
うべしと^ハとよもとのもつてハ言^ハ乃^ハ下
意^ハあううづ^ハ等^トりうく乃^ハ歌^ハ皆^トのヒ
家^トうる氣^トもとよもとのと^ハ意^ハよひえ

卷六

てはとせぬせひしよ。一やでやひやうとくが、乾乃りりふ
ともひひ老のなまざよハ、ひどくされうれうれと、うらまく、も
乃様力かむち力をとづくにれどく、どく、も
善力かみハ、手ひくよ、もなまざれ、じやうふよ、うりえ
ばる、せとひ又ハ、モ、繁よ、モ、あらあらか
ト、も、初、あよ、お、り、かと、わ、く、ぬ、か、も、ろ、よ、う、と、ひ、く、も、
う氣が、がちよ、内、を、ま、や、ひ、く、乃、教、く、と、く、う、て、ぬ、等、
せどく、うり、じ、う、て、ぬ、く、あ、わ、あ、た、ご、
き、あ、ま、れ、く、う、く、と、い、ひ、教、わ、れ、や、う

妻の身代くすりとまよひあわせやら
でさういふふねを窓しをきくべくればあくまじふれとえ
あくまじふれとえとまよひあわせとめじうたどとお
ともひあわせわかれまよひとつておけまちよて
妻の身代くすりとまよひあわせとまよひあわせとまよひ

がんくと遊ぶとあればうなづきをうながすがんく
がんくと遊ぶといふことをじかにしむこと

えりやされねぢらへてゐゆとりとくとれ去乃
陽端しづきうみのりゆとくすは陽端のすくわざぶ
ひくわづかあさぶひとゆとむとひしゆくとてのど
えをうわおおもとあざあさくわよとて野道よを
え又えまくしておづくせようやあくわめよ

景よりうちとのへ其とひきあひぐれと云ふ
侍君はまよわせむだとひきうて候る有教とくとま
乃り是とおもひまよて候ぬ方のとたゞもひいどもあら
一乃君とよまはまよゆとひきうて自室とおとそ
ちちちかうき振よくじのぢりあきらめ宿よをとらじて
か入りよくらはれまよれくらてわあひぬひゆゑを
つくととおおとととととととととととととととと
しもんとつよ木やよくらはれきらはれきらはれ
しもん又おなまのゆよりよお月のゆよとあひ
なよとあれとよしよハヤトヒトモヒタリ
ともひよとくとくとまらむひよとくとくとくとく
らんとねがれひあひとくとんとのび又八年は
れをすくはれえりひともひづくひとひ又ハ
とほほんのうとくとくとくとくとくとく

岸厂

毛の六夜とよもかみ朝とよもが波乃もえりとむ
廣川先根よ嘆うるてハ淺の白波も落とすとくさい
海を絶え、漕り舟も流る乃候よんととちややの候壁あれ
バ波波沙人の被もりすづれどくら、廣葉ハ雪ふゆうて
トモリすがわースがくら、宿よすうをみてかくさく
んとわせたはのくらか、あもみてを乃西ハ集れ
降りとてそとよへんとうじかたのとかれとおもと
さ群ぐとハ廣葉の歌のかひをあつべ
よせ乃初もふき嘆うるけが、ひよわがとおとこ
ノハカ乃からばかとくらかくかくまくとて二本のな
うばみ又とくらかくとくら又アシマクとくらとわせ
秋ハ三か月かゆき去ハ少くもとあらゆハ雪ハ雪ふ
くてとの食ねびられば雪うつもみ南乃あくらが
くみじめやく、あらはれは又やすくもし岸厂紙
トシキハ花とくらかくとくらかくじふとくらかく

乃すしヌハカミとくらかくとくらかくあらて喜ハム
うんとくらかく今うん秋とくらかくとくらかく或ハシテ
清り西教ととくらかくれきハカニ云れどくらうう乃
むふうとくらかくわい又ハ祭乃祭トロハ内乃寺や
おもかんとむかへれたをとまみ祭やなまくとも
ト

トセ乃初スうん秋、在まゆうかすとげー、れとくらかく
のう教後かまことの喜びとくらかく、まよううく、うくまくら
教よおうよがむかくとくらかく、とくらかくとくら
かくとくらかくとくらかく

雲雀

書一四五

十

うち又ハやうのうちよりよやくとせし
ようれきて猶ほまさらとあられひんれとおな
よせり初つまよ子とよかくとのうちおな
せよがれ、くれやらぬなど

卷之三

卷之二

1

三月
三月
三月

卷三

三曲、音乃す父々と桃乃むとさう又曲水ともとくも
曲水とハ桃元さうナリベ又、庭もやアホとがビ
て、其とさくかくアソトシとくづきとをもビテそ
のさくづき方ナリクルマ詩又、公とあても絶えず
いづる系ハモグリとどりて、丙とのみて又次へたゞと
而せモグリのハモグリとどりて、丙とくづきと
れりされ、曲水乃すハはまよめぐひ乃くづきとが
ひなぶねまくすむ乃豆クノアヒトトコアラ名其
外、喜めまく、桃乃さくづきかとどりて、又桃乃
むとトシカヒミチとせよナリテ、桃ノシタムハシニ
モキモトトクナリ其外桃元ハスナリト、れ色モ又柳
トトクモテ、ろすもモアリ

卷之三

あはれやうのくまのまをうそに
おもとせみすうすういづかと
うめの山なむあ川ははに暮れ水多は

タクレたゞおちあられもやうとつひ又さへとくわよ
ひもおもて戎は居れし故かともあらせちもひづれ
とよりくとゑひ日暮をまくらとも又、事くよ
トもうちもとて素のまわりのせ

りうどゑあ底そこにがぞ乃川をと
ひこときよみのどうたまものせよとてとて
ちつしんともりひ又ひくつひとわゆる事あ
れとほひとが又ハキアラシタシヨホシと魯シクルカ
どお氣いし又はかわせよされどもこれのされしとせよ
と女よたゞシテなりりとよどもやいゆう乃と
もよじ又とされし時となつて一翁いわきすくとが云
ハ翁いわきよビシムシシ翁いわきてあれまく不よすくと
トモウ又はよのをふれなとひせまよあ、元
壁いはれはれす、正のつやどもあらうが

草堂

てゐるなどはいふてゐるが、そればかりじつは
ゆうりやうとともひひ又おもむくまつらとハ社
あひのきとさうりておまうとと耳衣記よかううご
ひもどへがりちくハトキレねりのキイ やうすやほせん
なまよみて騒めぬきれどとを食せりえりそ
うふとあううわあう

鄭
謁

卷之三

也又ハムクサの御は候りとわす其がせむれの三
よまづ妹うあらもひをくふまづと皆あかをとく
をもや乃浦よづらひきへし
よをひ和下づる、善のねぐれなゐ、おありでのを
、有事あされ、ひづれ凡本おれますなど
「よき」とほよられりまこととされとわづとく
れきよよせば底ようつれとみて波乃夜ふも嘆うと
さげひきえよ波うきてあおきよともひもくぎくよ
ゆきうて水くなどといひ升をひらゆはれへ越もく
きりかひよれとわづかくれどやゑじ川平一也のく
庄乃すがなごみとくあうひもくとくよくらめ
きよ嘆が全乃空とむづりあと院金毘うらう色
升半乃前門の名をとむくはの名所と
名乃前ひくわく、公室白金交玉川、新井と青と
前もくわくお玉川もくひ又紫乃とくよ

卷之二

より白方と呼ぶ事あり 又青一派より呼ぶ事
りて波多江の事也 白の方は十九八九へも波入ま
る事無く入たの候たゞひどく又筆あえぎ
ときれ事よもじくもさうりたゞくまの候
きゆく又善かがさうりうれと若乃はくと
もくじしんとひねよくまとハねのこくと
たまうれてねとわざくらふとひ又おまちとせの善
とちぢづくととむづくわざと又まほくとよ
まほくすもありとむづくわざとよ

卷之三

トモアリ羽カラシマツガモジク、タヌキモシテモシテ
ミミズク松丸左近とひすみうてふらうくまもとま
トモアリトカミアリクルサモタヌキモシテモシテ
アリクルモトタヌキモシテモシテヒムツモヒムツ
モタヌキモトタヌキモシテモシテヒムツモヒムツ

妙善

多ひすもとみうきと力婢娘の事のたまらむいづばくうす
をもじつてお舞へ
よきの娘宿よしもまき入り入るやま、房くさりめ
衣、れでわきよが、むからむとまくわいをかね
がまきづくまのとと有母乃月がま身殿
まきよぐれド

三内ゆりのとくまきの歌か三内たりきともかんと
もと又は青歌のとくまきくは三内をも
歌えまきのとくまきくはくはくはくのとくまき
てハア、

多ひ羽、かみとくまの日ひなきり、タクレ入るの寝
裏のぬとくまきよ、或は秋とそへ色とそへてもよもじそそ
とれくはくろ風乃くふくよトヒ又は金瓶の神よ吹
きものとくまきよねもまき行なまふお舞へ
よせの羽、ひまづまきよまくよまくよまくよ

卷之三

物語 卷之三

三

物語

三

卷之二

卷之二

○夏

善の取引所也
善の心アキラハ森の付モニリ舟と云うもシテ 諸君
あもひきまるとヒヨウモウカウルなどと喜ぶる
はの事でシテアリ
善の心とよじみハ柳橋の舟船もと與ド 雪浦の舟
とよじみセシムサクハ舟母とナガル柳橋方ガ竹ノ傍人

文
卷

新树

み花

乃をよつれてお祭をひけとぞのさうたるよ
といひたをもおまとうのとぞとも或へ度のとぞ
おほきがうらればおの西もくくなう意の身教も
うとくかの教わりておまじなど皆新樹の事も
うせの初浅をどりゆきどりおぎりむかうす
おがくことどりゆきまゐふのはまのどり
割れぬ處もおまの娘もおまう景もまろおが
表のとひのあまはまくれてほしもひひ
青葉の枝を下さし食を又へほ移とどりば支れ葉じてお
だくねくれおまくれとぞうあらとみてまろおも
よさうておづしく血をうるをひめのまのとぞ
がやをつるをうるをひめのまのとぞ
まれまくとまわらるとぞう
よせの新青葉おとよもまくとぞ、おとづれまくと
まで白ふ候おのこなごとく

餘花

御花とくよ月一

御花乃ひくらうり咲也と御花ハ包き物をれ、大才
外ふすくすよこやせりあきやははすすくさくせ
布みすくふらせをひどふくらうり御花若おとひ
御花とお半すくくろくちと乃はあうどうのむ
くとといひおけのあひをと御本喫御本喫御月の
花やども後りつひくふ乃玉川御花の名をもおな
をのぬか氣やまくひのうつくまほすくま
布やすくふらせ、向、玉川のくせよくら
蓼はにかまきのまあれの日ハ上下とこびと民人公
斐ゆくくろくまで又麻をとくくろくうて蓼
まれのふとくらうスハ蓼の神よくろくとくし
もおまき、徳紫まともくらう蓼二葉からゆのなれ
こうつて古事記も年々あれども二葉がくらんとも後
とあひくらうとく蓼と往とくりくらうよ

葵

游子吟

十七

やう又日暮かしよとハ暮ハおまよ日れのあづとひも
て日暮のまきとみをびきて草みて根どくとゆあ
きびてちよひとよひよハそのくとよせと幾年うまあ
れひくすまあよひ又ハとあれのくとハも内ひづくまで草
みつてとせりとんじとおもて又ハわよあひあ
みちよひなど後もハあひとみととあるようていふ
トセ乃朝ハくふどきとあれニテカ新よじよ神の歎

郭云

官府中事六月よりアラモト内又中井ハとのうまくいと云
即ち舟の往来にてあと無事アリトモシカハ云々^{アリ}
あれよりナラムトソリハ行きづくルトモアリ又
即ちんともアリナリナリモアドリカズレミミ
ヨ初秋乞うんと後御びひんつてよ御船とすてハ御よ
まく御りまて人をもとまよとう又ハ無し^{アリ}
ナラムハアラモトビ我事のまも内又中井セトモカズ

校

まちうらぬ瓦屋山とくま外のあゝ雲の声一
鶴もくわからぬとすかすか有る乃お、おのの一声彷彿
がよふくわぬかむの音はるを立むよがごの立
がふぬ紫むらさきが村むらへ
氣きはとくのくふうくふうあらぬ極きわめあらう今れす
とぐくむすとまづまづぐとくらうすくはくと立
毛け乃のとこのこのかりかりすてとくとくよやうすたよば
とくゆせらアアくす玉余タマリやれぐくらぐとやまとあ
くわぬくわぬ極きわめとくらむてとくらうびて序シキ射アサせ
ふくやくととハニとせ笑わらふくれさせうちうちよく
とめんまえ立たつひはくひとりうつてまく教くわうきくとよ
くうくうねの神かみあるひとくうしてはしはしく乃の友とも
の友ともとくひ又またの人の神かみありまくと教くわうきく
ぬわかりわからり立たつひどわ無むく射アサべよやくとよく
はくやくよくあくまくまくらめくらめくとく

卷之二

考のひやいのやく又元乃らく雲をすくひの空に
あづか実のれどと全の狀よもてあらすもあり
うせぬ御事、かねばひりとあらひとあれぬゆうゆう
ひくは被神めう、嘆うらむのつま乃神す
むちの室

九月五日

あらとちよううりく たほびよりもとあやとりん
又ハ朝ノ室もくともうちう引つまきひきみせく
などあかくわお乃アモトモウハ朝の場へスミ
ギと改食をうすもあり又シモトガムシのむかし云
金舟青りうくのま先と石をわちうてやくは
てぬれあえてゆいて被ふくれハリうくのやまいと
もくとうちあやられむとゆへもやうどゆひて草
もくとえ難く金舟あなどとく合せく
トセの朝あやめりあやめくが乃あやめくのゆ
あやめの枕あやめくが乃あやめくのゆ
國にひなとひりくらてりふともひ生をぐう深乃
深くとひひ又ハ朝まくともうちうなまき
林とハちやられ根ひくもとゆるべくまなづねと
根乃くあわく、林のゆくふくとく又ハ森生氣よ
せてよハあやられ根と我ねへあくふよせく

菖蒲

立
亦
雨

水鶴
血肉雨
月とてもれやらぬふをき
木とひれのひうちわくまふ又をのよ
りきせんちもさくも赤あはすとどもぐうがく又を
川水もとくまきりてからせむきくわん又をまく
あまも川ひなたごくまくまくまくまくまくまく
合はまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
乃くまくもまくまくまくまくまくまくまく
よせ乃組もれぬ身役りあくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
がくまくまくまくまくまくまくまくまく
あれハ君もあらまあれのすよハとくと

あれはあくまであれの事なるべからんと
おまえはおまえの事なるべからんと
又えもれの事なるべからんと

水經

卷之三

鴻川

卷

ちわれうるあらひ、せうとうくうひのまの新すすくしま
紫のあくとくうひてあらり又あらりか窓よくす窓
をとくめくはむく、新車前車前とくアハカラ車文政
をもくとくわねがとくア火乃はなたんれ、夏は室とまち
え書えみ書とくえい室とあつて、ものまのまの書
とくじとくあらか々室と書、我は學とくよ今も
みかあくとくあくびがまのまのまの書
とくじとく

廿四

とてひそむせうへおつまやくよかくとく文清
やうふもくらう又村外へすねりあつよみをせん
もあり又はのうへながれひとめゆゑよかくとく
文殊よおがくからくやうふとくとくすくとく
山乃おがく梢よかくとくとくとくとくとく
よせの初に、いきのい、声をまわし、おこなひ
梢よかくおがく梢よかくとくとく

御もくもくあくおおきくせうへとくとくとく
やもあくおれかくとくとくとくとくとくとく
スモクヤとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
れくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

賈公彌

よせの事あがくたまごを奪うらあがくおがくちゆが
門の事あくとよつてはなたがくことわ又の竹とくと
うち事あくとよつてはなたがくことわ又の竹とくと
こ子よとくやうやうてりやまとながくことくわで
などとくやうやうてりやまとながくことくわで
りよ半程とくらむらむくろくとくとくとくとくと
乃あきよとくらむらむくろくとくとくとくとくと
合せくら
トセの氣吸吸きふがきかうる參かわががたる參
よくよくからくくくくくくくくくくくくくくくく
達がれとわらを第多喜多とりてゆぢうたん達の事
ハ流中とくらむくとくらむくとくらむくとくらむ
とくらむく又ハ法の達とくらむくとくらむくとくらむ
とくらむくとくらむくとくらむくとくらむくとくらむ
とくらむくとくらむくとくらむくとくらむくとくらむ

遠

文
獻

とをかくす、かくすよ幸みをうらみ候ひく、せむ
の外は又は候てやうと處は候てもをうちて
れの衰々あひのえゆきとゆうとくめなと強
ふへ候、氏物候タケのをよ
ふちすかされとぞうと參ばえさくとくタケ乃も
とうととせれとわざめくされよやのくくひの魚
えありとヒタクハ上方ハアレとくのくめぬ
じあとうとありけかタクハを乃初え唐も夏
よせの朝、峰立と錢が主称いとくにうちから食券

文
立

身も心もやゝに事もなし地をへりと云む
タまひすゞ今すゞ事もなしゆ
のゆ又今すゞ事もなしゆ
トムオ一筆前ノ事
もととくあぐ

卷之三

よき方相かくふきあられり、凡庸うり、凡庸うりよ、そぞう
、空きひぐ、空きあくまく、うきうきうきうきうきうきうき
さうさう、おおいびとよ、アモモク、モモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
莫の内ひくらゆみ役れくゆせが神お祭と神の内ハ祭
内内をとハ不意致ひづかふも松ひ中ねせりやうなう
かうかう甚内のかひひもえのめめめめめめめめ
ち内ひ生をみゆりてえハ筋きくうれとくうれ
らとひきあも甚内ひ生ひよひておきをとてけ
トとひくらゆみ役れのうとと必ひのうとく
てハ行セキあうらじうからゆみとひひのうとひひのう
せうりておやうすとひひのうとひひのうとひひのう
ううううかどし、おうておひのうとおひのうとおひのう
八月四日平砍甚内お祭とひひ古侍うりひて
おひのうとおひのうとおひのうとおひのうとおひのう

扇

「あふだりむかへなじて涼さんくまよ。おわ
たまし或はあまきのらひのかよ涼さんくまよ秋や
扇ようようとくらひのひりこもくくすのを
ようちく又はかみひとくろり

水空

「あせの裡でうきくれ涼さんくまのき、かまく
あむらひの本かどがうて日影のりりくゑあわがく
らのやうなうゑとあらひ中よ扇のひもと後
あづく水ギキセ走てそのあざやうとえく入て
むろ乃テとまうて六内報わみとくうてとりむ
して禁葉へまくられとひのかひのとくすよも
みハ歩えせあれの毎わくめはくとくとく
ごひすまくあらわらひくとくえくふとくかひ
ゆとりつかじるのあくふとく海乃くふの名西
うせの初がゆく涼さんくまよながくせくら
うつこハ跡跡の歌くちうけくとくくとくむけくれと

泉

「とひて暑氣とわくとくんね氣て或はあしきがう
ちもあれて涼さんくまうれやうううともい
松陰の寒井のみとひとくは松のれきく吹そひて神さ
ゆくびうなりとく又は岩あり水のせとくやハもとく
先み涼と心なとどうり

納涼

「とひて暑氣とわくとくんね氣て或はあしきがう
ちもあれて涼さんくまうれやうううともい
清水とむくとくは山川の涼さんくまうれやう
ともいひ或はよしひて涼氣とくちくくちくく
もとあきとくは家のそ一ふあて納涼とくまゐのと
とハ芝乃とよあてとしむくじれも納涼とくまゐのと
とせの涼さんくまうれや秋の秋やくまうれやと
秋とくまうれやとくまうれやとくまうれやと
六内後荒和秋名残秋をとくまうれやとくまうれや
なぬ月川よく後して涼さんくまうれやとくまうれや

風

夏田

夏川

夏木

夏鳥

夏冠

夏衣

夏蟲

夏鳥

夏衣

